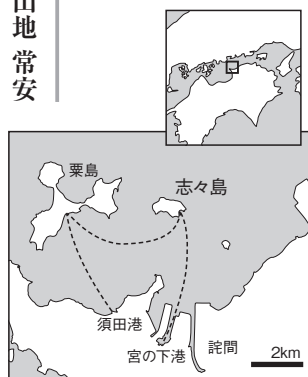


一七人の島、 「島おこし会社」を設立

志々島振興合同会社業務執行社員／リターン

山地 常安



志々島：詫間から5.5kmに位置する標高100mほどの島。面積0.74km²、周囲3.4km、人口24人(平成29年12月1日現在)。頂上まで開墾され、良好な漁場にめぐまれている。沿岸漁業や花卉栽培で繁栄し、一時は200戸1000人を数えたが、昭和30年代から高度経済成長に伴い住民数が激減した。

島の大楠と呼ばれて夫婦で移住

幼稚園までを過ごした島の風景を見に帰った。北部の山中に樹齢一二〇〇年といわれている、守り神のような大きな木がある。その大楠に心惹かれたのか、妻が「ここに住みたい」と言った。それを聞いて、自分の頭に浮かんだことは、「住むといったって、家はどうしよう」。それだけだった。

そのうちに、可も不可もなく、島への移住は私たちにとって決定した事項となった。のちに妻は、「大楠と呼ばれたのよ」と言っていた。

瀬戸内海に浮かぶ香川県志々島は、周囲約三・四キロの小さな島。連絡船は日に三往復、対岸までは二〇分ほどだ。お手軽な距離ではあるが、そこは離島であることにかわり

なく、車もなければ、通るための広い道もない。もちろん信号もない、自動販売機もコンビニもない。

自転車と手押し車(台車やリヤカー)で物を運ぶ。島には小さな商店がひとつある。郵便屋さん海を渡って各家まで来てくれるが、宅配便は島の船着き場まで取りに行かなければならない。でもネット通販は使える。

昭和の初期には一〇〇人以上が住んでいたという島も、移住を決めた時、住民は二〇人だった。当時、私たちは五五歳。ふたりとも決して若くはないが、この島では最年少だった。

古い民家を自力で改修

若い頃島に住んでいたこと、親戚が近隣に住んでいたこ



半世紀ぶりに故郷にUターン、島おこしをすすめる筆者。

とがつながって、紆余曲折を経ながらも、現在の家を紹介してもらうことができた。

家主さんの親戚が住んでいたという家は、古い平屋で、大黒柱が床下に落ちていた。人が住んでいないと、家は簡単に朽ちてしまうことを実感しながら、ジャッキで柱をあげ、継ぎ足して固定することから始めた。家財を処分し、天井や床を張り替え、浄化槽を入れ、水回りを備えつけ、泊まることのできる状態になるまでに仕事は山ほどあった。

もちろん、大工の

経験などなかったが、若い頃に看板屋の仕事を手伝っていたことが助けになった。物の構造や使う道具はなんとなくわかっていたし、どうやればできるかを考えることはわかっていただけ。

当時住んでいた

神戸から島へ通いながら、住むために必要な作業をひとつずつこなし続けた。必要な材料は対岸のホームセンターなどで調達したり、島に残っていた母の実家（朽ちて崩れる直前で住めない状態）の中から戸板などを取り出して使用したりもした。

家を貸してくれた富子^{とみこ}おばさん（島では歳上の女性を「おばさん」、男性を「おっさん」と呼ぶ。もちろん敬意を込めて）は、私たちの移住当時、島でたったひとつだけあるお店を切り盛りしていた。

お店には、飲み物やお菓子、乾物などの食料品や、洗剤やタワシなどの日用品が並ぶ、いわば「志々島の百貨店」だったが、生鮮食品は販売していない。対岸のスーパーに買い物に行ったり、島の人たちから野菜や魚を分けてもらうこともあるが、自分たちでも畑で野菜をつくったり、海で魚をとることが必要だと感じた。

移り住む前に神戸で小型船舶の免許を取得したが、船はなく、お金もなかった。

ヤギの導入、大楠の保護プロジェクト

島での暮らしも板についてきたある日、島に縁のある三十歳代と五十歳代の男性ふたりが島に帰ってきた。話を聞くと、この先もここで暮らしたいという。対岸にある工場でのアルバイトも紹介したが、彼らのような人たちが島



仔ヤギたちの世話（当時の写真で、現在はいない）。



現在飼育しているヤギさん。

のなかで仕事ができるよう、産業が必要だと考えた。周りの方の助言もあり、福武財団が瀬戸内に対して行っている助成事業に応募した。ヤギとニホンミツバチのコラボ農法、花の島復活プロジェクトというものだった。突然、知人からヤギを取りに来いと電話をもらい、はじめのヤギが島に来た。以降、買ったたり、もらったり、出産によって増え、多いときは十数頭のヤギが島にいた。ヤギの小屋をつくり、草を食べさせ、乳搾りやチーズづくりも試してみた。ニホンミツバチも巣箱

を置いて、何度かはちみつの採取にも成功した。しかし、ミツバチはスズメバチにやられてしまい、巣箱は空っぽになってしまった。人手も足りず、ヤギを産業にすることも叶わなかった。ヤギは現在四頭を世話しており、島のマスコットのな存在となっている。

平成二二年には、NPO瀬戸内オリーブ基金が地域のシンボルの木を守るために展開している「大きな木プロジェクト」のひとつとして、大楠の保護を支援いただけることになった。島の住民で「志々島大きな木プロジェクトの会」を結成し、基金の方やボランティアの方々と連携しながら、

大楠と周辺環境を守る取り組みを積極的に開始した。

樹木医さんに大楠の診断と今後のアドバイスをいただき、見学会の実施や手すりロープ、大楠周囲の柵などをつくるための材料費を助成していただいた。見晴らし小屋の建設にもオリーブ基金から助成をしていただき、大楠を見下ろせる場所に小屋をつくった。島に帰ってきていた男性ふたりの力も借りて日々作業をした。完成した時には新聞やテレビの取材があり、インタビューに答える彼らからも達成感の笑顔がこぼれていた。

目標に向かって
一歩踏み出したと
きから、成長は始
まり、足を止めな
い限りつづく。

彼らを育てたい
などと思ったわけ
ではなく、目の前
の人を喜ばせたい
と思ったときに、
そこにいたのが彼
らだった。まだま
だ産業化するには
道半ばだが、私自
身も一緒に成長し
ていると思う。

自由に利用できる休けい所を整備

活動を進めるうちに人脈も広がり、フェイスブックでも情報発信をはじめた。応援の声も増えて、大楠やヤギを見るために少しずつ人が来てくれるようになった。その頃の暑い日に、島を訪れた一人の男性が熱中症になり倒れた。通りかかった島のおばさんが見つけ、家で休むことができ



志々島のシンボル、樹齢1200年といわれる大楠（県指定天然記念物）。

たため大事に至らなかったが、これは何とかしたいと思っ
た。島には自由に室内で涼めるところがなく、自販機もな
い。お客さんが来ても、連絡船を待つにも、座る場所や島
の人と喋る場所がないことはずっと気になっていた。そん
な折りに富子おばさんが、お店の物置としていた場所を「使
い」と言ってくれた。床を張り直し、いただいたテーブル
と椅子を入れると、それなりの場所になった。

カフェと書くと、ただ座りたい人が遠慮し
てしまうため、「休け
い処くすくす」と名づ
けた。飲み物やアイス
クリームなども置いて
はいるが、気軽に使っ
てもらいたい。現在の
「くすくす」は、観光客
の利用だけでなく、夕
方は毎日のように島の
住民が集まって喋って
いる。対岸で仕事をし
て帰ってくる若い住民
に、「おかえり」を言
う場所でもある。



誰でも自由に立ち寄れる「休けい処くすくす」。



自作した見晴らし小屋（楠の倉展望台）。大楠も見下ろせる。

島おこしの合同会社を立ち上げ、ゲストハウスもオープン

ふたつの大きなプロジェクトを終えて、少しのんびり過ごしたいと思った矢先、男性がひとりUターンしてきた。その後、彼とともに平成二七年四月、「志々島振興合同会社」を立ち上げた。対岸の三豊市で不動産関係の事業をする女性が生が島の活動に興味を持ってくれ、三人で会社を運営することになった（のちにもう一人が参画、四人に）。

「移住者フェア」を行い、見学会・お泊り体験会・移住相談会と称して、島を訪れてもらうツアーを開催した。

また、島にある朽ち果てそうになっている立派な日本家屋の修復についてメンバーで話し合い、費用をクラウドファンディングで募ることにした。フェイスブックなどで呼びかけたところ、たくさんの方に応援いただき、目標金額を達成。屋内のひとまをきれいに修復し、完成記念に落語やコンサートイベントを行った。

それらも移住者フェアとして、プログラムに組み込んだ。

フェアをきっかけに二人の方が移住を決めたことから、住居を探したり、修繕したりと、必要な作業に協力した。初期費用がかかること、まだ産業がないために仕事について考えてもらわないといけないことは、これから移住を考えている方に、しっかりと伝えなければならない。二人は現在、対岸で仕事を見つけて島から通いながら暮らしている。

この会社によって「きんせんか」（かつて志々島の主産業だった花卉栽培に由来）というゲストハウスの整備も実現できた。大楠を見学を訪れる観光客から、宿泊ができればいいのという話を聞いており、これも必要だと以前から思っていた。「きんせんか」はAirbnb（エアビーアンドビー）というサイトに登録してあり、海外からも予約することができる。素泊まりで自炊が前提だが、日本各地だけでなく、アジアやヨーロッパ、アメリカなど、世界各国のたくさんの方に利用していただいている。ゲストハウスができたことで、私たちだけでなく、島のおばさんたちとゲストとの交流も生まれている。アメリカから来た方にスカarfをプレゼントされた九三歳のおばさんが「英語ができたらいいいじゃろうなあ」とつぶやいていた。新しい人との出会いが、好奇心をもたせ、人を元気にすることは明らかで、島に笑い声とともに活気が出たようだった。

島からのメッセージ

●移住希望者には丁寧に対応、島の人口を30人に

私は現在77歳です。東京で長く暮らしていましたが、体調のこともあり、故郷でゆったりと釣りでもしながら暮らしてみよう、と思ったのがきっかけで志々島にUターンしました。移住当初は、島で一人暮らしをしていた姉の手助けとして、畑仕事を手伝うことから始めました。しかし、畑は80歳を超える姉が一人でやるにはあまりにも広く、私も毎日草取りに明け暮れ、なかなかゆったりした毎日を過ごすというわけにはいきませんでした。

そこで少しずつ畑を縮小していくことにして、時間をつくっていきました。山地さんたちが活動していることが徐々に理解出来てきたころ、彼から「一緒に参加してほしい」と誘われたので、島内だけでなく対外的な協力を必要とするのではと考え、便宜上も法人格を持つ組織がよいと話し、志々島振興合同会社を2人で設立しました。

すると、すぐに出資して参加したいと1人、その後に1人と、島には縁のない2人が参加してくれて、会社も3年目になります。

設立した次の年、香川県の協力もあり、移住募集のイベントを企画し、結果的に2人移住者が決まり、現在に至っています。男性と女性1人ずつですが、だいぶ慣れてきて島の行事にもよく参加してくれ、本当に助かっています。少なくとも島の平均年齢も若くなり、高齢の住民も大いに刺激をうけて、明るくなった気がします。

メディアの影響もあり、今年は10件以上の移住希望者の訪問を受けていますが、できるだけ時間をかけながら、相談に乗るように努め、大切に対応していければと山地さんとも話しています。当面の目標は島の人口を30人にしようと、会社のメンバーと楽しみながらやっています。

(志々島振興合同会社代表 北野省一)

若い人たちの定住を！

私たちが移住して一〇年になる。住民は現在一七人だが、うち一〇人は私たちが移住してから増えた住民だ。今後はさらに、できれば若い人に来てもらいたい。人手が足りないために手をつけられなかったことも、きつとできる。

自然に人が減り、何かがなくなることも仕方がないと思う一方で、自分が生きているうちに島の人口がゼロになり、無くなってしまうのは寂しい。長く過ごした神戸も、志々島もどちらも、ふるさとのような感覚を持っている。昭和三十年代のような、時が止まった雰囲気も、できればこのままがいい。

山地常安（やまじ つねやす）

昭和27年香川県志々島生まれ。4歳のとき家族と神戸に移住。平成19年に夫婦でUターン。「休けい処くすくす」を開設し、同27年には他のUターン者らとともに「志々島振興合同会社」を設立。移住促進イベントを開催し、空き家を利用した島唯一の宿泊施設「ゲストハウス きんせんか」をオープンさせている。